社団法人私立大学情報教育協会
平成21年度第2回CCCコミュニケーション関係学運営委員会議事概要

I. 日 時： 平成21年9月4日（金）午前11時～午後1時

II. 場 所： 私情協事務局会議室

III. 出席者： 北根委員、阿部委員、中西委員
事務局： 井端事務局長、森下主幹、山野上係長

IV. 検討事項

1. 学士力内容詳細について

前回に引き続き、コミュニケーション関係学における学士力案について精査を行ったところ次のような意見があった。

- ・ 最近の学生には、相手の話をよく聞き理解する力=受信力が弱まっている。また、受信して行動に移す力も併せて弱まってきている。
 - ・ 日本型のコミュニケーションとして、言語に頼らないものが重視されてきた。しかし、大学では、英語によるコミュニケーションのように、言語によるコミュニケーションを重視することで論理的な力をつけることができるのではないか。
- ・ 聞く力が重要で、よく相手の言うことを聞いて理解しないと適切なレスポンスができない。日本型のコミュニケーションでは場の空気を読む力が求められていたが、その力が落ちてきている。非言語型のコミュニケーションを再教育するのか、あるいは欧米型の言語中心、自分の主張を通すような教育を行うか、どちらにするか検討が必要であるが、現状ではどちらも中途半端な印象がある。特に学生が狭いコミュニティの中でとどまっている。また、聞いたつもり、分かったつもり、という学生が多い。そこで、ハイコンテキスト(非言語)、ローコンテキスト(言語)の両方を取り上げてはどうか。「考えたことを適切に言語、非言語で表現できる」という到達度が考えられる。なお、この分類では、メディアなどはハイコンテキストに分類される。
- ・ コミュニケーションのための道具の選択方法もスキルの部分に含めてはどうか。そこにはメディアの特徴を理解し、適切に選択するという事も含まれる。それができるようになるには、体験を通じて習得するしかない。コミュニケーションは学際的なものであり、たとえば、医学分野では、医療コミュニケーションが言語および非言語で上手くできないと治療に必要な情報が引き出せない。学士として基本的なスキルと言える。
- ・ スキルについては基礎的なものと専門分野におけるものとの二本立てにしてはどうか。
- ・ コミュニケーションは本を読んで分かるというものではなく、読んだ上で体験するというフィールドワークが重要である。たとえばインタビュー実習などの体験を通して、何を学んでいくのか実感することが重要である。
- ・ 到達目標として、日常のコミュニケーションおよびパブリックな場での日本語表現力を身につけることを基本にしてはどうか。
- ・ スピーチやレトリックの学習は'話す'ということが基本になっている。口頭で如何に伝えるか、議論やディベート、相手を説得するためのコミュニケーションと、文学的な表現の美しさを追及するのとは異質ではないか。
- ・ 自分を伝えるということ、自分が何をしたいのか、相手に何をしたいのか、そのために、ディベートや説得コミュニケーションをスキルとして学ぶことについて、日本語の授業では体系立てて行っていない。英語の授業ではそのような授業が体系立てて行われていることが多い。国際的に活躍するための英語的コミュニケーションを学ぶことと、日本的なコミュニケーションを学ぶことは分けた上で、同時に教えていくというスタイルがよいのではないか。
- ・ 日本的コミュニケーションは、異文化コミュニケーションの一つとして考えている。英語であれば斯く表現するものを日本であれば如何に表現するのか、という形で考える。比較の軸を持ってこないといけない

ない。

- ・ 発信力にしても受信力にしてもさまざまなテクニックを理解し、それを実践に使えるようになる。それに加えて文化の違いを理解するという点に関して言えばグローバル（海外の接触の中での自分）を理解したうえで自分を理解することが重要である。
- ・ 日本人は集団的といわれたが、最近はそうなのか疑問がある。組織の中での位置づけが理解できていない人間が増えているか。集団と個人のあり方見直す機会与え、集団の中でのコミュニケーションを持つというのも一つの到達目標となりうる。コミュニケーションに問題がある人を救おうと思うとカウンセリングになってしまうが、ディスコミュニケーションがなぜ起こるかについて、理論、概念のところで取り上げてはどうか。
- ・ ディアは理論に分類される。メディアを使って何かを行うというのはスキルに分類される。「メディアを批判的に読み解く」ということは、適切なシチュエーションで適切なメディアを選択すること、情報は人の手によって作られている事を理解するという点ではないか。
- ・ 受信する側がレトリックを理解するという点も求められる。情報を構築するには人の手が入っているということを知ること。メディアリテラシというのはその面が大きいのではないか。
- ・ コミュニケーション関係学の専門は「理論・概念」になりそうだ。スキルについてはごく一般的な意味でのコミュニケーションスキル。二段構えの学士力構成とするのがよいのではないか。
- ・ 普遍的なコミュニケーションと、コミュニケーション学で扱ってきた枠組みを当てて再構築する。パブリックな場でのコミュニケーション、ディベート、グループディスカッションが一般的なコミュニケーションであり、そのほか気づきなどを理論に留めておけばよいのではないか。理論的な説明を加えるのは授業で可能である。
- ・ プロダクションについては、映像の製作実習を通して概念を習得することができる。実践、経験、理論が上手く回らないと意味がない。
- ・ 普段のコミュニケーションをいかに客観的、理論的、批判的に見直すか、そして改善させていくか、それが達成目標ではないか。状況に応じたコミュニケーションのメカニズムを理解し、実践できる。
- ・ スキル、理論に分けないで、大まかにコミュニケーションの到達力を書き出してもらって、そこに先生方に到達能力の詳細内容を「〇〇できる」という形で次回持ち寄って整理してはどうか。

以上の意見を総合すると、「受信能力と発信能力」「言語および非言語によるコミュニケーション」「基礎的および専門的コミュニケーションスキル」「メディアの特徴を理解して適切に活用する」ことなどが到達度として挙げられることで共通理解を得た。

2. コアカリキュラムのイメージ、到達度測定について

到達度の評価について検討を行ったところ、客観的に図れるかどうかというのは難しいとの意見があった。コミュニケーションが上手い人のどこがどう上手いのかというのを客観的に説明することは難しく、包括的に箇条書きにできない部分がある。これについては各委員の考える評価方法を自由に意見として持ち寄っていただき次回以降検討することとなった。

3. 今後の進め方について

以上の検討を踏まえ、次回委員会には、各委員より、目標、到達度、評価測定方法についてメモを持ち寄っていただき、コミュニケーション学の学士力全体像の枠組みを検討することとなった。なお、次回委員会日時は、10月9日午後5時～となった（注 後に10月23日午後0時45分～に変更）。

4. その他

日本学術会議の動向について、事務局より次のように説明があった。日本学術会議では、世界レベルを想定した高度な学士力を検討しているが、それに対し、エリート教育としての必要性は認めるものの広く社会の要請に応えられる内容となっていないとの指摘が本協会の加盟校からあった。本協会では、ミニマムリアイアメントとしての学士力を提示し、各教員、各大学が考えるきっかけとなることを期待したい。